

三河アララギ

平成二十六年

新年号

第六十一卷 第一号



ニューヨーク日記(87) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

August 11, 2013 : La Concha

Blue Shoe Diaries



サンセバスティアンのラコンチャビーチ綺麗でしょ?グルメの街で知られているけど夏は国際(?)花火大会もあるの。一週間かけて毎日違う所が花火を披露。打ち上げる直ぐ側で見れちゃうから迫力もかなりある。あまりにも凄くって時々ちょっと心配になるぐらい。でもと～っても面白かったよ。

This is La Concha beach in San Sebastian. Gorgeous, right? San Sebastian is well known as the gourmet capital of the Basque region but in the summer, they are also known for their international fireworks competition. For a span of 7 days, each participating location puts on a show. You get to see this right by where they light the fireworks so it's very dynamic and you can really feel the explosions. There's nothing quite like looking at fireworks so close! Amazing!

目次

第六十一卷第一号(通卷七二一号)

表紙 椿	今泉 由利 (1)	どんぐり	白井 信昭 (29)
ニューヨーク日記(87)	Blue Shoe (2)	公孫樹	阿部 淑子 (29)
感銘歌 御津磯夫第十歌集	大須賀寿恵 (4)	心の声	寺田 秀夫 (29)
歌集「スモン」	岡本八千代 (5)	『ことよせ』	いーはとぶ (30)
尾花のかがやき	今泉 由利 (6)	『俳句』	植村 公女 (31)
四次元	弓谷 久子 (7)	『かさね』の一句	一石 (32)
寄せ植	青木 玉枝 (8)	私の一首	佐藤 喜仙 (33)
五平餅	内藤 志げ (9)	贈呈誌	杉浦恵美子 (34)
燕	佐藤 喜仙 (10)	ある自然科学者の手記(20)	大橋 望彦 (35)
今年の秋	安藤 和代 (11)	絹の話(38)	今泉 雅勝 (36)
木守柿	伊藤 忠男 (12)	物理学者と詩歌の世界(48)	鮫島 一石 (37)
中くらい	林 伊佐子 (13)	短歌に詠まれた茂吉	山本紀久雄 (38)
きのご狩り	胃甲 節子 (14)	楽しい時間(14)	貫名海屋資料館 (39)
ホトトギス	足立 晴代 (15)	『歴代天皇御製歌』(二十)	夏目 喜仙 (40)
茶の道	鈴木 孝雄 (16)	子規の短歌革新とアララギの歌人(18)	佐藤 喜仙 (41)
クアラランプール	清澤 範子 (17)	富士山の短歌 (4)	岡本八千代 (42)
柏手	富岡 和子 (18)	「氷魚」のことから(156)	今泉 由利 (43)
野菊小菊	伊与田広子 (19)	ことのはスケッチ(42)	平松 温子 (44)
目標	半田うめ子 (20)	編集室だより(二〇一三年十一月)	和菓子街道(87)
野田川	近藤 映子 (21)	お知らせ・編集後記・三河アララギ規定	
霜月と成り	杉浦恵美子 (22)		
木簡	平松 裕子 (23)		
キヤッアイ	山口千恵子 (24)		
明るき世界	小野可南子 (25)		
清白	夏目 勝弘 (26)		
冬たちぬ	高山 逸穂 (27)		
高尾の山	高橋登奈美 (28)		
武蔵野			

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

昏^くれてゆく黄葉^{もみぢ}の中にくれなるの紙風車まはる止^{とど}まりながら

たまさかに歩める我を驚かし遁^にぐるごと勿れ朝霜の五位^{ごゐ}鷺

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

教員の復職審査のきびしさを吾は説きつつ茶をすすめる

洗ひるるわが掌に日のあたり五色の泡の消ゆるたまゆら

双手にてかたみに脛をもみながら臥しゐて一日暮れてゆきたり

尾花のかがやき

蒲郡 岡本八千代

曾孫があした来るのよ庭遠く尾花の白穂かがやきゆれをり

ざんざらにみな西向きに穂のゆるるけふの尾花のあはれ美しくうま

海よりの風の吹きつつあはれにも尾花の白穂西向きかがよ耀ふ

曾孫が小さきもろ両手をひろげくるわれも両手をひろげ彼あを待つ

嫌いやなれば「やだ」とはつきりこの二歳しばし楽しき冬の夜かな

包み解けば「谷戸やと歩き」とふ菓子の名あり鎌倉よりの友のまごころ

「谷戸歩き」に未だ見ぬ「路」を空想す木の葉散りしく赤き路かも

洗濯ものやうやう干して静かにも小さき次郎柿の皮を剥きつつ

柿喰へば天田愚庵をおもひ出す子規に柿をば贈りし友ぞ

冬の雲夕焼雲の朱あかき雲われの書屋の窓より動かず

四次元

東京 今泉 由利

いつの間に一億年の誤差はあり今日の講義の一三八億年

四次元にあたりて思ひ馳せてみる九次元十次元無限の次元

見逃がせし流星群の流れ星見逃がすは無しプラネタリームに

パンワインにしん一匹トルテツロミケランジェロのメニューを真似て

枯れ蔓の間に間に赤しからすうり炭団坂たんどんざかを下りゆくとき

四次元は黄色黄色に満たされて東京大学公孫樹並木

この年の落葉踏みゆくサクサクとどうしてゐるか寂しくないか

水明かり丁度もみじに照り陰る三四郎池昼下りゆく

宇治川を渡りゆくとき甦るあのことこのこと昔と今と

ひこばえは大和田毎に緑なし静かに静かに冬に入りゆく

寄せ植

豊川 弓 谷 久 子

繁りたる檜の枝剪らむ子ののぼる梯子を我はしつかと押える

子と二人檜の枝打ちの幾日ぞ我が庭漸く明るくなりぬ

つつが無く正月迎へたし葉牡丹の小さな苗を寄せ植したり

熱も無し血圧も良し流感の予防注射もつつがなく済む

とりどりの色に染まりし並木樹のこの道今日も我一人

幾年の落葉の上に落葉散りと若き歌人の遺稿を憶ふ

酷暑の夏を預かり呉れしを感謝せむ今日退院の姉を見舞ひぬ

この家に嫁ぎ来りて七十五年姉にはやはり終の住家か

又姉のもとへと通う我の日々えにしなりけり姉と妹

孤独な趣味よと子は笑ひつつ頼みたる漢字百選買ひ来てくるる

五平餅

新城 青木玉枝

玄関より日課の様に山並の逝く秋を知る枯葉の舞ふを

あたたかき部屋の窓辺に日向ボッコ今日のひと日を如何にすごさむ

老いて知るこの淋しさは何故何故なげなげと心に問ふも答なき今

指折りて待つ楽しみは紅葉狩り行楽弁当秋日和の下

久し振り板チョコ割りて口にする幼き頃のホロ苦き味

二人して流れる雲にそれぞれの想ひ出話つきない日課

手のひらに受くあたたかき五平餅一口食べれば味噌かおりの香が

昨日まで全然知らぬ人の中施設の縁えにし不思議に思ふ

柿すだれ車窓に見つつ山里に逝く秋を知る雲は流れて

真夜さめて毛布一枚重ねして夢のつづきをもう少し見たい

蕪

豊川 内藤 志げ

本宮の山の中ほど白々と帯なす雲に山低く見ゆ

雨上り本宮山の中ほどに帯なす雲はどこまでも白

みかん畑細き道をば曲りまがりカーナビ頼り蒲郡の大楠

二重三重柵を廻らし守られる清田の大楠若木に見ゆる

車より抱かれ下りる姉上はシルバカーを軽がると押す

ケアハウスに暮す姉さんあね穏やかにみんなやさしと両手を合す

顔を見るそれ丈でよしと姉さまは今日の別れの笑顔うれしも

悉く蕾も葉っぱも飛ばされしダチュラに若葉霜月半ば

学校の給食用にと二百Kの蕪の注文夫は受けたり

バスを下り夫とはぐれて一人なり一人もよろしと人人の中

今年の秋

東京 佐藤喜仙

道の辺の青き芒の若い穂は朝日を受けてしろがねびかり

三四郎池の樹間の暗がりに美禰子の顔の浮かびたるごと

美禰子の言ふストレイシープのやうな雲今も多くが学府をさ迷ふ

公園のラジオ体操に集ひ来し翁媪の朝のおしゃべり

思ひ出は他人に話すものならず静かに心の奥に秘めをく

世の妻は墓に入るに夫選ばず友を選ぶと聞きて侘しや

目に掛けるスマホがはやり歯止めなき競争どこまで恐ろし未来

免許証の更新のため講習を受けねばならぬ身となりにけり

手は達者口は輪をかけ達者なれ齢かくせず足腰弱る

秋といふ季節は誰も好きなのに今年の秋はいづこにありや

木守柿

豊川 安藤 和代

久に訪ふ祖母の故郷広き田は今一面にそばの花咲く

勤労福祉会館と建つ石裏に叔父の名の刻まれあるをそつとふれみる

木守柿小さくなるを窓に見て少し厚手のセーターを着る

晩秋の風がこんなにも心地よきけふは娘の一時退院

冷え増せばさらに色濃くピラカンサ花なき庭の位置をしめをり

菊花賞天皇賞とねらい馬はずれてひとりパンジー植うる

四世代和して暮らせるお隣りは今年も庭に満開の菊

孫はみな吾の背丈をこしてゆくわずかに幼の面ざし残し

落葉らくように落葉のまた重なりて蠅螂ひとつ動くことなき

北風の夜は他人ひとにも己にも厳しかりにき亡父の声ぞ

中くらい

大阪 伊藤 忠 男

庭先は色とりどりに菊化粧香りと共におとずれる秋

冷え込みも雲多くして中くらい秋とは言えどまだ夏蒲団

放射能ブロックしたと舌の音の乾かぬ内にまた流れ出る

休日の朝は床から庭眺め起きるでもなし眠るでも無し

冬服に変えるは早し夏衣では朝の冷え込み耐えられぬころ

するしないはつきり言わぬが我が国の美徳なりとは他国通じず

冷え込みに身体引き締め電車乗る出発合図に今日が始まる

衣替え段取り狂う今年まだコートマフラータンスの底に

曼荼羅のここは浄土か現世か喜びあるはわが手の中に

限りある命ならこそまたとなき生ある今の今ならばこそ

きのこ狩り

岡崎 林 伊 佐 子

落ち枝を杖につきつつ登りゆく雨後の急坂しめりて滑る
持ち山を巡りて探す松茸も皮茸も出ぬ天候異変に

山の尾根に鹿の寝た跡猪の寝た跡残れる秋深き山

蜂屋柿しみみに赤き実をたりて夕づく村を明るがごとき

飽食か老いたるゆゑか何処にも柿の実あまた木々をいろどる

秋の陽に乾きて行きぬ柿の実も日ごと皺みてやせたる甘み

皮むきて軒端に吊す柿の実に物資に換へし戦後をしのぶ

庭松の根方に据ゑし巨わおき石に座りて子犬の遊びを楽しむ

アララギに詠みたる歌を自家集にまとめて吾は余生を送る

落ち葉のせ地の皮のせし霜柱やまより出でし朝日にかがやく

ホトトギス

豊橋 胃 甲 節 子

美しき紅葉となる蔦の葉の一枚も見ずして深みゆく秋

美しき黄菊の名前思い出せず雅な京の地名なりしを

気に掛りをりたる庭の草取を今日こそせむよ風が無きゆゑ

予防注射に行こうと決めし十五日朝より寒し雨がしき降る

落葉せる吉野桜の木未迄葛登りゆき大き葉はためく

籠るのみの吾に楽しき話題無く黙せるままに新聞切抜く

冬の気配感じる風の冷たさよ暑い暑いと言ひたる十月

ホトトギス色良きものを活けてみる何と優しき紫の色

はや雪を頂く富士を仰ぎ見るテレビなれども神々しき富士

受話器より妹の声はや泣きて泣きつつ不調の日々を語りぬ

茶の道

東京 足立晴代

晩秋の鈴なりの柿いつしかに照葉に残る木守一つ

菊人形歴史に残りし人々が白、黄、紫紺の秋のよそおい

全国の津々浦々にスポーツの若人集いし秋日和かな

選ばれし人々努力の甲斐ありて栄ある今日の見事な姿

菊の香に薫る秋の日きそい合うくつ輪並べてみなぎる気力

大輪の菊鉢前につくり人眺むる心いかばかりとぞ

秋の日も早や寒空に変はりけり釣瓶おとしの日暮おとづる

口切くちぎりの茶事ちやじを迎えて折る指のふりかえりみる永き茶の道

東京タワースカイツリ互いに競いて空高く夜空の星と交わりて

次々と思ひもかけぬ天災にはらから達のあつき支援を

クアラルンプール 沼津 鈴木孝雄

孫家族のクアラルンプールへの引越しに荷物持ちならと一緒に行く

引越し先掃除片付け孫のお守り力になれず手持ち無沙汰だ

クアラルンプールで奇抜なロール寿司の味今やお寿司は世界料理

純白の浜木綿に似た草花にクアラルンプールの暑さ and 和らぐ

八日ぶり畑に行つてホツとするピーマンと茄子に食べごろの実

白い花未だ咲かせるピーマンを玉ねぎのため根こそぎ抜きぬ

青虫は昨日全て除いたのにブロッコリーにまたのうのうと

玉ねぎの苗を七条植え付けてしっかり育てと土を押さえる

寒風を物ともせずに飛ぶ鳶夕陽を受けて翼金色

寝坊してテレビ体操休んだ日はリズムが狂いテザリング不可

柏手

春日井 清澤 範子

酷暑日もやうやく去りて清すがし朝日の中に菊に水やる

猫も居ぬ鳩も見かけぬ境内に午後の参拝柏手を打つ

玄関の日々草に水をやり空見上ぐればうす赤き月

中庭に降りれば椿の繁り濃く所どころに花芽着きをり

十五夜の月は高だか満月に雲なく澄みて木犀香る

夫と詣でる八王子神社の拝殿の鉾材の賽銭箱に鍵かかりをり

飛び石の置きたる庭の草を取る足腰の位置を左に右に

故郷の足助紅葉の香嵐溪ライトアップを報じる写真

故郷の香嵐溪の賑わひ伝へる報道に青葉を少し残せる写真

喘息が再発しをり神社まで行けず床の中でひたすら祈る

野菊小菊

東京 富岡 和子

壁へだて極相林の高速音木洩れ日ひかり蜻蛉は池に

実葛探して歩く自然園びなんかずら美男葛さねかずらの別名と知る

国花です野菊小菊の色と香を手折りカップに充たすしあわせ

旅みやげ日高昆布の風入ればセーターともで小春日和に

秋日和三日月さやか東側宵の明星あかねに染まる

遠廻り银杏匂う構内を衿を高めて初木枯し日

木枯しに银杏落るアスファルト踏みて楽しむパチリパチリと

紅葉の湖畔に遊ぶクラスメートトッ焼き草餅ヅの看板を見る

今年また赤い椿の咲く旗日バケツの水に少し湯をさす

年令ごとに期限迫れる区検診予約のけさは朝食はなし

目 標

豊橋 伊与田広子

毛蟹あり鱈場蟹など見当らず資源減少ここにもあるか

紅鮭は物産展には見当らず良き物は次第に減少す

好物の鰻は次第に高くなり減少したるとわれは聞きし

暑さにて熱中症を心配し家に籠れば膝痛み出しぬ

柿の木はまだ葉は青く実も青き熟れて落つるは鶉ひよの仕業か

岩合の世界猫歩きグルジョアへ漁業の盛んな海辺の町

岩合は猫の頭を撫でながらい子だねと云いつつ写真撮る

膝の痛み我慢をしつつスーパーへ暖かくして痛み直りし

二十年風邪を引きたることもなし肝腎腸を温むるのみ

百才は五万人突破われも又健康で百才を目標に

野田川に

新城 半田うめ子

野田川に多くの魚のそよぎつつ友と来たりて楽しみ眺む

モロヘイヤ健康野さいは友よりの貰ひて食むる感謝をしつつ

心使ひやさしき詩乃のもちてくる赤き玉葱吾の好みなり

会ひたきのやさしき友よ何故に線路の中へ入りて永眠みん

徳定の友をたずねて行きたるも行先不明残念なりぬ

市役所より固定資産税ぜいもちくる事を通知ありたり意味の分らぬ

吾にやさしく杉浦様は線路にて電車に轢かれ永眠したりき

諏訪にての山の如くの土地なりき父とたがやしき思ひ出すなり

諏訪にてのたがやしたりきさつま芋味いものよくして父は喜びし

霜月と成り

名古屋 近藤 映子

日曜日娘と共に見舞いたり夫はテレビ私は足擦りぬ

久ぶり時習六回生の同窓会87名伊良湖岬のビューホテルに

今落ちる太平洋に真丸の夕日のまぶし伊良湖岬に

今落ちる伊良湖岬の太陽は真丸赤くゆるり降り行く

わが夫を見舞へば赤き顔看護師に言へば熱を計りぬ

われ副鼻腔炎と内科医の吸入器使用の指導を受けたり

わが夫の余命は一日ごとに減り行くに吾今見舞へず苦し

内科医の帰り路の歩道桜楓の紅き落葉拾ひ来ぬ

余命残り少きわが夫に大相撲見せたく娘と急ぎ行く

師走末孫誕生と我夫に耳元にゆるりと話せば目は大に

木簡

蒲郡 杉浦恵美子

幾つかの問題あれどもかくは胸なで下ろす健診結果

語ろうにも夫は居らねば何事も自分の発案自分の責任

立山の表層雪崩の記事を見て夫は居ぬのに心騒ぎぬ

我が夫がこよなく愛せし立山を雪崩の記事にて思ひみるとは

鼻先に近付けて見る今朝摘みし路傍の野菊蕾いとほし

麻布に白糸を以て臊^{かが}りゆく幾何学模様が織り成されゆく

大極殿彼方に望む朱雀門あれその間^{かん}を電車が突つ切る

参河国幡豆郡篠嶋と墨書さる木簡見つけぬ平城宮跡資料館

篠島の海産物の荷札なる千三百年前の木簡が在る

篠島は我には奈良より近けれど行ったことない何やら可笑し

キヤツアイ

豊川 平松 裕子

キヤツアイと名を持つ花の咲き継ぎて夏から秋へ秋から冬へ

遠州灘漁する船の影あまた明けぬる朝の海は久々

渡りゆく浜名大橋朝なれば真白き雪の富士の見えをり

西の方晴れぬる空を目指しゆく行けども行けども雨は止まざり

行けど行けど晴れぬる空に届かざる潮見坂より三河の空を

トンネルを抜けたるときに雲間より青空見ゆるここは愛知県

五つづつ揚げぬる五角形の油揚げの一つ一つが一樣ならず

低温にて揚げぬる時間の七・八分五角の角の一角浮き上がる

十分を経てやうやくに浮きってくる一樣ならず五個それぞれが

五角形をくり抜きのこる三角の油揚げ求む客の増えをり

明るき世界

豊川 山口千恵子

こんなにも明るい景色があつたのか白内障手術の眼帯取れし
知らぬまにわが老いたりと淋しめり眼内レンズに明るき世界
目地の汚れ目立つ風呂場にとまどひぬ白内障より甦へるわが目
紫の斑点までもくつきりと眼内レンズにみる花ホトトギス
手ぎはよく夕餉の支度して行きぬ勤め帰りにわが家に立ち寄り
降りそそぐ秋の光にカナヘビは冬眠前の身をさらしゐる
台風に倒れしままの皇帝ダリア倒れしままに今年の花咲く
庭隅にひとり生えなる南瓜の蔓たぐりてゆけば幾つもの実
植込みに石路の花はな黄色住みゐるし人は介護施設に
秋の日に南天の赤枸杞くこの赤円実光る輝き光る

清すず白しろ

豊川 小野可南子

まだ遠き春待つ草々に朝の水小さき虹をたたしめながら

朝戸出の一步思はずとどめたりしろじろ真白霧ふかくして

掌におさまるほどの小辞典「外来語便覧」我が必需品

庭木々の枝先の秀ほのそここに飛び移りつつ尉鶉うづらの秋

刈られたる田んぼの土を掠めつつ二羽のつばめの描く流線

均らしたるさば土の上先ず一番紋付き鳥は降りたちにつけり

キチキチと高みにしばし百舌が鳴く澄みすむ空に響き透れり

清白すずしろの名こそ相応ふさはし我が畑の未だ細めの真白大根

ウサギ跳ぶ今日の入江の波間には風に真向ふ鈴鳴の群

標高は四百米この山荘招かれ望む三河の海面

冬たちぬ

豊川 夏目勝弘

窓よりの日差しを遮へぎりぬし被ひ今日は朝よりふたたび付ける

稲刈りより乾燥と手をかけしワラの香りが部屋に満ちみつ

朝の日を遮ぎる雲の動きの遅し汚れの目立つ窓ガラスごしに

この朝はまだカラスの声きかず我が視界に動くものなし

庭なかのコケの緑の寒ざむし部屋よりのんびり見る時間がある

いつ咲くか咲かぬかもしれぬコチヨウランに冬の囲ひをとりあへずする

庭松に巻かむコモを編まむ日を週間予報の雨の日を待

銀ネズの雲に透れる銅鏡の白なす太陽みつめてゐたり

木叢よりひとときは伸びし徒長枝のかすかに揺るるあしたなりけり

高尾の山

「招待」 秋山逸穂

とろろそば喰わんと思ひ立ち寄れば高尾の山は紅葉燃えたつ
硝子窓の結露の雫ぬぐいとりしばし眺めぬ道ゆく人を
海風は容赦を知らず吹き抜ける一斗缶に燃える炎まぶしき
だるま船去りし川面に起こりたる波は葦の間深く入りゆく
公園の紅葉隧道くぐりぬけふたびもどり幹に触れたり

武蔵野

東京 高橋登奈美

武蔵野の面影残す緑の地終の棲家と決めた場所あり
穏やかな気持ちになれる街路樹と高層建築良くマッチして
踏みしめた土の感触柔らかし教会の中の自然味わう
柔らかな土に積った落葉踏み紅葉の公園散策楽しむ
握手してValleriamと別れたよ少し淋しい週末となる

どんぐり

豊川 白井 信昭

どんぐりのひとつふたつポケットに明るき昼の御津埤頭ゆく
引馬野の田に管理機音を響かせてキャベツ畑に変わりゆく畝
朽ちかけしトタンの屋根は風受けてカタカタ音す秋の夕暮れ

公孫樹

横浜 阿部 淑子

宇宙よりアイソン彗星オーロラと輝き届き夢見る如し
合唱祭五十二組の演奏をすべて聴き終え耳は満載
小春日に坂道降りて迎えしは赤黄装い舞い散る落ち葉
神宮の公孫樹並木は黄金色落ち葉かけ合い人は戯る
成人式の振袖試着の孫娘祖父母にほほえむ上品でしようと

心の声す

東京 寺田 秀夫

暮迫る心さびしい一人身は広い部屋のまん中に居る
この庭の眺めさえあればいづこにも出掛けたくない心の声す

『いじよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

敬老の祝ひの菓子のはぎの餅亡き夫に供ふ幼も鐘打ちて
またひとりまだまだ若き君が逝く幼き孫娘の涙もかなし

石田文子

雨すぎて二匹の小さきカタツムリかがみ見むとす黄金比の殻
芋掘りに土より蚯蚓ミミズ這ひ出づる悲鳴あげつつ飛び退くわが幼

山崎俊子

いただきし松茸を前にやや悩む如何に料れば満喫能ふやと

亡き父の手帳に見つけし我の誕生日ああこの文字よ篤くなりつつ

水野絹子

吹き荒れし台風のあとにもわが畑の大根の二葉は生き生き真緑

わが土手の杉の大木倒れたりトビはいつしか巢立ちたるらし

牧原規恵

仙台より帰りてまずは手を洗ふほのほの温しわが家の井戸水
誰が住みしかまた一軒となくなりぬ今日の秋風我に過ぎつつ

稲吉友江

奥入瀬の早き流れに沿ひて歩むせせらぎの音たゞ聞こえつつ
佇める八幡平はちまんたいに立ちこめる岩手山より白々の霧

鈴木美耶子

神無月中置の釜の湯気たちて鳴りてくるなり「松風の音」

十三夜月の月の光はやはらかし赤き毛氈に座する我らに

吉見幸子

裏庭の巨松の枝をひきちぎり台風二十六号やうやう立ち去りぬ

草除けのシート外せば現はれりセミの穴とかこんなそんな

牧原正枝

どこからか金木犀の花にほひ来いま手に受くる友よりの手紙

無農薬の野菜作りに夫は今朝も出でてゆくなりピンセット持ちて

岩瀬信子

『俳句』

シュークリームぐるぐる廻し明治節

植村公女

ゆったりと時流れをりすすき原

日展や上野の森の大道芸

本能にまかせて鳥の渡りくる

一石

今日の日も釣瓶落として暮れにけり

秋深しわが生きざまを振り返る

『かさね』の一句 十二月号

諸花より人目あつむる葉鶏頭

佐藤喜仙

萩まつり古刹で薯をふるまはれ

松本周二

彼岸花遠流の島の行在所

古川千鶴

継がれきし飴切るリズム秋澄みぬ

川井素山

狭庭にも来し初冬の兆しかな

安藤虎醉

散歩道我を追ひ越す野分かな

田島昭久

憂きことを全て忘るる今日の月

長久保郁子

亭主より一言あつて零余子飯

小池清司

バス停にとしより並ぶ秋彼岸

山本草風

金閣寺水面を伝ふ鹿おどし

岡野安雅

山里の香りの強き走り蕎麦

青木英林

大伽藍鐘の音重し秋の暮

池内とほる

秋日和釣り糸絡む舟だまり

田中清秀

秋夕焼カリヨンの音流れ来る

小柳千美子

愛犬の逝くや台風通りけり

盛岡陽子

眺めつつ古歌口遊むけふの月

橋本修平

ログハウス屋根を転がるくぬぎの実

丸山酔宵子

古庭の萩のトンネル風抜けり

和田勝信

きわだちて彩あざやかや秋の虹

柳田皓一

朝寒や路行く人の咳多し

後藤克彦

宿を出て秋草抜けて太平洋

長島清山

母と子の笑顔が踊る運動会

吉田博行

私の一首

揚雲雀光の点となりてなほ空の奥へと奥へと昇る

佐藤 喜仙

四月四日に山梨県上野原の桂川のほとりをぶらりと歩いた。上野原は昭和の初期のころ歌人、与謝野鉄幹・晶子夫妻がいくたびか訪れている地であり、晶子は上野原の景色を約二百五十首も詠んでいる。

桂川は上野原で鶴川と合流し、流量も増え川幅も広がっている。川原には、いぬふぐりや仏の座といった春の野草が咲き、向いの山から鶯の声。対岸の上空には雲雀がおり、一点となり青空の中に透けこむようであった。

電子機器の削除のボタン無情なり瞬時に消えぬ三年間が

杉浦 恵美子

単調な暮しの中で、ふと携帯電話の夫とのメールの遣り取りを、整理して保存しておこうと思い立ち、何百件のメールを一つ一つ確認してはその時々を思い出し、と眼を酷使しながら数日掛かりで作業し、漸く完了して最後に保存するつもりが何故か削除ボタンを押してしまいました。三年分の遣り取りも保存のための労苦も雲散霧消。その後半分位回復できたものの便利だからと言って電子機器に頼り切ることの危うさを思い知りました。

贈呈誌

△青森アララギ 第三百八十九号 叶 楯夫

ひよどりの争ひし林檎雪に落ち居間にふたたび妻との会話

△愛媛アララギ 十二月号 西本すみ代

傘につきし笹の葉はらひてたむとき共に登りし亡き君思ふ

△鹿児島アララギ 十一月号 福仲 功

平和の「和」をその名につけし初孫の歩き初めし憲法記念日

△高知アララギ 十一月号 佐竹玲子

夜の明けは誰に会ふなく草わたる風のにほひをすがしみて行く

△冬雷 十一月号 水竹慶一朗

地下出でて炎暑の街に折りたたみの日傘をひらき陰もち歩く

△柀 十一月号 山田範子

嫁ぎくる吾にと姑は四玉算盤購ひいましき範子と書きて

△群山 十一月号 千葉利二

堤防の高上げしたる一端に水難供養の観音像建つ

△榎の木 十一月号 鈴木晃子

夫に合はせ糖分少なき食事して低血糖のわれの検査値

△穂の原 十一月号 荒川榮子

バス停で仲よくはなす人は皆見知らぬ人で話しがはづむ

△明治神宮秋の大祭

献詠作品

あさがきたつばめにあえるつうがくろきようもいちにちげんきにすぎす 小一 林 眞心

とべバッタにげてけバッタ草ハラにこんど私がつかまえるまで 小二 大嶋 舞香

なぜだろ授業はきらいなはずなのに短歌を作るのとても楽しい 小五 金沢 咲希

友達をつくる思いで話したら今では無二の仲間となりぬ 中一 亀田 典杜

雨雲が空の面積占めてゆくペダルこぐ足少し速める 中二 本谷 優香

恋なのか憧れなのかわからないまるで夜空の星と飛行機 中三 米川 美樹

ある自然科学者の手記 (20) 大橋望彦

『何かをしている人間』②

では、専門家とはどういうことなのか。やはり、技術なり、知識なりが誰もが認めるほど備わっていないければならない。そのために学校に行つて知識や技術を学び、誰にも引けを取らないものを身につければ、後はそれを如何に磨くかに係わつてくる。中には、学校に行かずに直接師匠となる専門家に教わり、技術なりを見につけ、それを基に磨き上げて立派な創作に入る人も居る。そのとき師匠からも十分に技術を身につけたことを証明する免状を戴く人も居る。まあそれでもよいが、偶には、未だ十分に身に付いたわけでもないのにお金を積んで、免状を戴いてしまう性質の悪い人も出て来る。これは、一種の権威主義によるものといえるので、免許を持つているものに対して政治的、経済的に有利な立場を生ずる制度のようなものが出来てしまったことが要因であるが、免許という水戸黄門の印籠を翳せばなんでも通る風潮がそれを煽つたのであろう。この権威を一般化するた

めに国家統一を図つたのが国家試験ということ、特に技術関係の資格取得として広まつた。

一方では、科学者には学位という肩書きが付くようになった。ところが、芸術家にはその様な制度が適用されずに相変わらずの徒弟制度の名残のような免許皆伝が幅を利かす時代が続いている。作者が『何か作つた』結果として、世の中の評価が生まれてくるのであるが、その前に権威がちらついたのでは正しい評価とは言い切れない。とはいっても、この権威あるものの判断に委ねられているのが、本物か、贋作かを決める鑑定である。鑑定しなくてはならない位に、佳く出来ているものであればそれはそれで良いのではないかという訳には行かないのが、このパクリ（真似事）問題である。『何かやっていれば良い』のではないので、やはりここにもオリジナリテイの評価が問われるのである。この問題については、別に取り上げようと思う。

『何かする』ことは容易であるが、『何が出来た』は難しい。出来たと思うのは主観であつて、客観的には果たして出来ているかどうかは結論が直ぐには出ない。この客観が面倒なので、一体、誰が客観的判断を下すのか？

余程の『絶対者』が端で見ているならば兎も角、普通は評判程度なのである。そこで、作者は『出来た』と宣言すればよい。作品があれば、これを視よとやれば、一応の終止符が打たれる。これが世にある『展覧会』とか『展示会』なのであろう。

ここで、『展示会』などで、『展示即売会』の形がよくある。その場で作品が売買されることである。当然、其処には作品の価額が提示される。作品の価値判断が行なわれるのである。価額設定では、その作品の原価（材料費・経費等）に更に付加価値とを合算して決める。単純に加算しても結構高額になるものである。其処で気の弱い作者などは、付加価値を削ってでも安い価額設定をする。高くと売れないのでは無いかと案ずる為である。作者自ら価値判断を崩しているのである。芸術家はそれで良いのか？ 科学者がそんなことをしたらば、直ちに葬られてしまう。科学者が貧困に甘んじていられるのはその様なことがあるからであらう。それとは逆に、作品に付けた付加価値に自負心を強く持ってやたらに高い価額設定をして、買手が付いた時には、「やった！」という気持ちで、跳び上がる気持ちをしている。儲かったという気持ちも

然る事ながら、付加価値を相当と認められたことに対する感激があるからである。それと裏腹に、買手が全く付かないと、自分の作品の評価が悪いと悲観してしまう。これは必ずしも当たっているわけではなく、買手の購買力との相関（駆け引き）がそこにはあるのだが、受け取り方は、直裁的に、自分の作品は駄目なのか、と、悲観してしまうのである。といった経験をして、科学者だった経済観念の全く欠けている作者（筆者のこと。現在、木彫家となつている）は、この問題に面と向かい事実戸惑った。それと同時に、今までは買うほうの立場に居たものが、売るほうの立場に始めて立ったのである。其処で判ったのは、買う方の側にあつたときにはなんと無責任に価額設定をしていたのであろうか、ということであつた。その作品の評価をする前に、自分の懐勘定の方が先であつたり、何の根拠もなく値切つたりもして、全く身勝手な態度を深く反省している。これからは、作品の値踏みをする前に『何でこの価額が設定されているのか』を考えるようにしよう。

兎も角も、筆者が展示会を終えたときは『出来た』という宣言だけは終えたのであつた。

絹の話 (38)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

絹の素材、生産国表示

一般に販売する衣料品には決められた位置に使われている素材と生産国、生産者及び洗濯方法を付けなければならぬ事になっています。

ところが、日本には絹と云う定義がありません。商売を始めてしばらく経って、野蚕絹に本格的取り組み始めた二十数年前、前述の様に表示を付けてデパートで販売したところ、当時の通産省の外郭団体の人達が赤坂の当店にやって来て、「野蚕シルク」と云う記載はいけません、絹製品は「絹」と漢字で表記し、カタカナや英語表記は認められない、野蚕などと云う余分な表記は削除しなさい、また洗濯表示は「ドライクリーニング」とする様指導を受けました。その時、日本の絹の世界には「個人で蚕の成虫を交配させた者は3年以下の懲役に処す(罰金ではない)」と云う法律が有るのが頭をよぎりましたので、ビックリして、「今後この様な表示は致しません」と云う始末書を書きました。

国はこんな事まで細かく決め、外郭団体を作つて多くの人を雇用して取り締まり、多額の国費を費やしている

事に釈然としませんでした。

当時は絹の輸入は厳しく管理されていて、1センチ四方といえども通産大臣の認可を得なければならぬ時代でした。申請書に見本生地を付けるのですが、見本の端切れが密輸ではないかと叱責を受けたりしていました。輸入される品物には税番と云うものがあり、それぞれ輸入関税率が決められています。

ある時、提出した見本生地に係官が目留め、素材の質問を受けたので、「野蚕の絹です」と答えると、絹に関する書類をめぐり、「野蚕はこれにあらず」書かれていた一行が目に入りました。そうであれば、この品物は野蚕絹ですので、関税は免除されますかと訊ねると、自分には判定出来ないし、インボイスにシルクと記載されているので関税を徴収しますと云う事でした。

この事をふまえると日本では絹とは「家蚕」から作られた品物を指し、野蚕の物は絹ではない様です。

世界レベルではいざいれも「シルク」なのですが……輸入時は絹に非ず、販売時は絹表示と云う事では困ります。世界には絹を作る生物は10万種以上棲息していて、現在産業として世界に流通している物は数種類に過ぎませんが、大腸菌から作られるスパイダーシルク(蜘蛛の糸)はじめ様々なシルクが登場して来始めましたので、現代

の表示規則では対応出来なくなりそうです。

【生産国表示】

現在の日本で原材料から全て日本製の品物は非常に少なくなりました。絹もその例に漏れません。

一つの製品が出来る迄に繭を作る国、織物をする国と云う様に、コストが安く、技術の良い国を2カ国、3カ国を経て作られた物が売られている事が多くあります。

日本製と表示してあっても、表地は中国製、裏地は日本製、ボタンは……縫製仕上げが日本であれば、日本瀬と云うようになりますが、悩ましいのが未完成品で輸入してファスナーを付けてだけで日本製表示の物もある様ですから、生産国表示はあまり当てにはなりません。

洗濯表示

絹は5千年来、水で洗って来たのに、昨今ドライクリーニング表示が義務づけられ、その結果、絹が黄変や毛羽立ちの苦情絶がえません。スチームアイロンが普及した今日絹に優しい手洗いなど普及させれば、昔の人よりも上手に洗濯、仕上げ出来ると思います。

規則の上では今日も縫い込み表示はドライクリーニングですが、値札等と一緒に水洗いや野蚕絹の説明を吊るしております。

【今日の状況】

蚕糸業法が廃止された以後、輸入時の許認可は無くなくなり、少量の物には課税もされなくなりました。

また、直輸入完成品が増大し、店頭商品の品質表示に英語、フランス語、イタリア語など様々ですが、昔の様に役所からチェックを受けた話は聞かなくなりました。生産国表示はあまり変わっていません。

ただ規則や法整備が不完全ですと、生産者側の裁量に任される所が多く、消費者側との認識の差でトラブルも多く発生いたします。

絹は素晴らしい機能を持った素材で、特に野蚕絹はそれが顕著ですが、その機能性は公に認められていませんのであまり詳細に記載したり、話をしてはいけない事になっております。

年々品物に触っても素材の区別がつかず、表示を頼りに買物なされる人が増え来ましたので、表示は大事な事になりました。また、ネット販売等では更なる事です。

一般には混紡商品が多く解りにくさを増大させていますし、化学繊維が実にうまく天然繊維の様になっています。

物理学者と詩歌の世界 (48)

一石

リーゼ・マイトナー

リーゼ・マイトナー (Lise Meitner、1878—1968) はオーストリアの物理学者。放射線、核物理学の研究を行った。マイトナーはウイーンのユダヤ系の家庭に生まれた。父は、有名な弁護士だった(参考資料1、2)。当時、オーストリアでは女性に高等教育の機会とは与えられていなかった。1901年、やっと教育の男女平等が認められるようになると、23歳のマイトナーはウイーン大学に入学し、物理学を専攻。5年後博士号を取得。1907年、量子論の創始者マックス・プランクのいるベルリン大学に移り、化学者オットー・ハーン(注1)と共同研究を開始。当時のドイツは女性の学問進出に関して遅れており、マイトナーにとっては劣悪な条件下であったが、物理学者マイトナーと化学者ハーンとが補完しあって放射線に関する研究は目覚ましい成果をあげた。1918年、新元素プロトアクチニウムを発見、同年ベルリンのカイザー・ヴィルヘルム研究所の核物理部門の責任者となる。1920年、ドイツで女性の大学教授資格が認められると、2年後ベルリン大学の教授に就任。1933年アドルフ・ヒトラーが政権をと

ると、ユダヤ人排斥運動により、マイトナーは教授職を解雇される。1934年マイトナーは、ウランに中性子を照射すればウランより重い超ウラン原子を生み出せるという、エンリコ・フェルミ(参考資料3)の論文(注2)を読み、このことを追実験により確認したいと考えた。マイトナーは、ハーン、そして研究所の助手であったフリッツ・シュトラスマンの3人による共同研究を開始した。しかし、ナチスの迫害を避けるためマイトナーはスウェーデンに亡命を余儀なくされる。マイトナーはハーンとは手紙で実験の進み具合や今後の方向性などをやり取りしていた。1938年、マイトナーはハーンから「ウランの原子核に中性子を照射しても核が大きくならず、しかもウランより軽いバリウムの存在が確認された。何が起きているのか意見を聞きたい」という手紙を受け取った。一緒にこの手紙を読んだ甥の物理学者オットー・フリッツシュと共にこの問題を考え、原子核は水滴に似ているというニールス・ボーアの理論を適用すれば実験結果は核分裂として説明ができることに気付き、マイトナーはこのことをフリッツシュと連名で発表した。マイトナーは数度にわたりノーベル賞の候補にあげられたが、受賞したのはハーン1人(1944年化学賞)であった。マックス・プランクメダル(1949)、エンリコ・フェルミ賞(1966)などを受賞した。

エピソード

1) 核分裂の発見は、その後米国のマンハッタン計画で原爆の開発につながっていく。1943年マイトナーは英国の科学者に核兵器の開発への協力を求められたが、「爆弾に関わるつもりはありません」と断っている。

2) 戦後、マイトナーは米国で「核分裂の発見者」として有名になり、1946年の年間最優秀女性に選ばれた。またドイツで1994年に合成された元素(原子番号109)は「マイトネリウム」と命名されている。

3) ハーンはナチスの圧力に負けユダヤ人であるマイトナーを核分裂の発見者としなかった。ノーベル化学賞受賞のスピーチでもハーンは、マイトナーの功績についてほとんど触れず、その後も核分裂を発見したのは自分だと主張し続けた。マイトナーはハーンへの手紙で40年間の友情を裏切られた思いと吐露している。今日では、ハーンは核分裂の発見者であり、マイトナーは核分裂の概念の確立者であると考えられている。ハーンはノーベル賞の賞金の一部をマイトナーに渡し、マイトナーはそれをアインシュタインが運営していた原子物理学者のための支援委員会へ寄付した。

4) アインシュタインは、マイトナーを「我らのキュリー夫人」と呼び讃えた。

5) マイトナーの墓碑には、「リーゼ・マイトナー人間愛を失わなかった物理学者」と記されている。

注1・・・otto・ハーン (Otto Hahn、1879-1968) はドイツの化学者・物理学者。主に放射線の研究を行い、原子核分裂を発見。1944年にノーベル化学賞を受賞(参考資料4)。

注2・・・フェルミは「中性子を吸収した原子核は、ベータ崩壊を起こし原子番号が1つ上の元素に変わることが多い」という経験事実から天然に存在する元素のうちで原子番号が最大のウランに中性子を当てれば天然に存在しない93番目の元素を作ることができると考えた。そしてウランに中性子を当ててウランと違う放射能をもったものが生じたことを認め、これを93番元素として発表した。しかし後に、その生成物の性質を調べて、これはラジウムであったと訂正した。しかし、これは当時の知識から見ても不自然なことと思われた。

参考資料

- 1) Wikipedia,the free encyclopedia : Lise Meitner
- 2) S・ケルナー『核分裂を発見した人 リーゼ・マイトナーの生涯』(晶文社)
- 3) 三河アララギ、P 36、第58巻、第5号(2011)
- 4) Wikipedia,the free encyclopedia : Otto Hahn

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

十二 柴生田稔 4

しづかなるあたりに水は響きゐて鳴滝の道われにや
すらに 昭和三十七年 『入野』

鳴滝の瀬に立つ水の音ひそかシーボルトのあと空し
といへど

「長崎」 茂吉が「シイボルト鳴滝校舎」と題して詠んだところを尋ねたときの歌である。茂吉は水の音と医学生のことを「鳴滝の激ちの音を聞きつつぞ西洋の学に日々目ざめけむ」（大正九年）と詠んでいる。

曇り日を上りて来れば山門に八重のさくらの一木満
ち咲く 昭和三十七年 『入野』
その唐寺のいらかも今は残らねど雨はけぶらふ海と
山とに
石だたみ古りしをせめてよろこびて夕べふる雨福濟
禅寺

「長崎」二首目の「唐寺のいらか」は茂吉の「ここの

み寺より目したに見ゆる唐寺の門の甍も暮れゆかむとす」（大正九年）を踏まえている。三首目は茂吉の「のほり来し福濟禅寺の石だたみそよげる小草とおのれ一人と」（同）を踏まえたものだろう。

父母の墓のかたへに刻まれて道富丈吉行年十七歳

昭和三十七年 『入野』

ひき鳴くと君が歌ひしその池もひそかに見下し我は
去りゆく

「長崎」一首目は、茂吉が「ヘンドリック・ドウフの妻は長崎の婦にてすなはち道富丈吉生みき」（大正八年）と詠んだ墓碑を素材にしている。二首目は、茂吉の「長崎のしづかなるみ寺に我ぞ来し墓が鳴けるかな外の池にして」（同）を踏まえている。

茂吉先生ピカソを蔑したまはざりき後の世のため言
ひ置くなり 昭和四十一年 『冬の林』
君と見し古典主義時代のピカソ一つわが耳は聞きつ
君の言葉を

ヨーロッパ留学中に茂吉が美術館に通って多くの絵を
丁寧に鑑賞したことは茂吉本人の文章や歌によって知る
ことができる。とくにゴッホやブリューゲルには熱心で

あった。帰国後は「アララギ」の表紙に西洋美術の写真を載せてその解説を書いた。佐藤佐太郎の、「あるとき、表紙にするためにたくさんの絵はがき類を取出しているところに行きあわせた。たとえば、ウエロッキヨのダビデ像の写真があつたが、その裏面に剣を持った指さきあたりのスケッチがあり、注意したことがらについて書きつけてあつた。そういうスケッチ、書き入れのある絵はがきがたくさんあつた」（『茂吉解説』）という回想によつても茂吉の熱心さがわかる。

しかし、茂吉はピカソの絵については触れていず、人によつてはあの画風を評価していないと解している人もいたかもしれない。右の歌はそのような理解は正しくないということを言ったものである。

帰郷する茂吉先生と尾久までを奥羽本線に乗りき遅れし選歌のために
昭和五十二年 『星夜』

いつの頃のことを詠んだものかはわからないが、「アララギ」の選者としての、殊に発行人としての茂吉は多忙を極めていた。選歌のために宿を借りて徹夜しなければならぬこともあつた。この一首は帰郷の日になつても選歌が終わらず、上野駅の待合室でも終わらず、ついに柴生田を汽車に乗せて座席でも続けただろうことを想像させる。数十年前の上野、尾久間の所用時間はわか

らないが、せいぜい二十分ぐらいのものである。この間に終わったその資料を持って柴生田は降りたのである。

遠ざかり行く時の寂しき感覚を書き留めし「童馬漫語」思ほゆ
昭和五十三年 『星夜』

詠まれている『童馬漫語』は、明治四十三年から大正七年にかけて「アララギ」に掲載した歌論を中心に編んだもので大正八年に刊行された。柴生田はこの一冊から「遠ざかり行く時の寂しき感覚を書き留め」たものを読み取っている。これは、たとえば、「出来あがつた歌を読み返して見、感じを内省して見るとき、出来あがつた歌は如何にも虚偽のやうな気がして不満足を感じる」（『感と歌』）のやうな文章を指すのであろうか。

この日ごろと題して様々に歌詠みし斎藤茂吉を思ひ出せり
昭和五十六年 『公園』

茂吉全歌集を調べてみると「この日ごろ」の題は八回出てくる。他に「折に触れつつ」「この夜ごろ」などもある。この題に特別な意味はないが、柴生田は繰り返し読むうちに妙に気になつていてこのように詠んだのであろう。

楽しい時間 14

山本紀久雄

2013年11月30日

11月の「いーとぴあ・辻照子先生」の「ワインを楽しむマナーと料理」は、ちよつとした野暮用で渋谷まで行かねばならず、残念ながら欠席となった。今月の料理は①海老のチリソース、②タコときゅうりのサラダ、③ポテトのナッツ焼き。海老とタコとナッツ、いずれも好物なので残念だった。さぞかしいつものメンバーが、オーストラリア産のカベルネソービニヨン・シャルドネ・モスカートと一緒に楽しい時間を過ごしたと思う。

マナー教室の方は「ワイングラスの持ち方と乾杯のマナー」、出席された方からお聞きすると「ワイングラスは音を鳴らして乾杯しないのがマナー」ということ、これはグラスを底う意味もあるが「これも状況によって変化する」というのが辻先生のお話。これに同感する。

話は変わるが、先日、映画「大統領の料理人」を観た。フランス大統領官邸のエリゼ宮で、ミッテラン大統領の私的な食事作りを、1988年から2年間にわたって任された、実在の女性料理人ダニエル・デルブシユをモデルにした映画である。

彼女はフランスのペリゴール地方という田舎の生まれ。母と祖母から料理を学び、結婚し、25歳までに4人の子の母と



なるが離婚。1970年代にフォアグラ産業を復活させ、週末に始めた農場&フォアグラ料理プランが、食通や観光客の注目を集め、ミシュランガイド三ツ星シエフのジョエル・ロブションら有名シエフにフォアグラを売るようになる。また、農場ではトリユフも毎年収穫、地域初の料理学校を開校、自宅でレストランを開店、アメリカへも料理を教えに行くほどになった。

しかし、この程度ではエリゼ宮に赴き、大統領の私的な食事作りには選ばれない。というのもエリゼ宮には人を超えるプロ料理人がいて、彼らが交替で私的な食事作りを担当するので、通常ならばあり得ない。

ところが、ミッテラン大統領から「素材の味を感じたい。本物のシンプルな味。祖母の味が欲しい」という強い希望が出され、官邸がジョエル・ロブションの推薦によって彼女を選び、ペリゴールの田舎からパリ・サントノール通りのエリゼ宮に招かれたのであった。

因みに、ジョエル・ロブションを知らない人は、フランス料理について認識がないということと同意語であろう。ジョエル・ロブション(1945年生まれ)は、ポワチエ出身。15歳で、ホテル「ルレ・ド・ポワチエ」の見習いシエフとしてスタート。28歳で「コンコルド・ラファエットホテル」の総料理長に就任、1976年にフランスの国家最優秀職人章(MOIF)取得。その後独立し現在世界11カ国に店舗を持ち、ミシュランガイドにて総数28個の星を獲得しており、「世界一星を持つシエフ」としても知られている。

日本国内では東京に6つの店舗を持ち、そのうちの「ガストロノミー・ジョエル・ロブション(恵比寿ガーデンプレイス)」が三ツ星、「ラターブルドウジョエル・ロブション(恵比寿ガーデンプレイス)」が二ツ星、「ラトリエドウジョエ

ル・ロブション（六本木ヒルズ）が二つ星を獲得している。話はエリゼ宮のダニエル・デルブシュに戻るが、彼女の生まれたペリゴール地方は、現在のドルドーニュ県とほぼ一致するアキテーヌ地域圏の北部であり、ここに日仏合弁企業の親会社があった関係上、頻繁に出かけ、よく歩き回ったが、ヨーロッパ有数の手つかずの自然を持ち、美食で知られ、フォウグラヤトリュフの産地として伝統的に有名であり、古代ローマ時代の遺跡など、先史時代の史跡が豊富で、最も有名なのはラスコー洞窟がある。

さて、彼女はエリゼ宮で気持ちよく料理の腕が振るえたのか。そんなことはあり得ない。エリゼ宮の厨房は、シエフ以下全員が男性で、厳格な規律に従って働いていたから、突然に外からやってきた彼女に敵意と嫉妬をあらわにし、彼女もそんな彼らに反発する。

また、大統領の好みに合わせるためには、既存の取引業者では無理で、郷里の農場や知り合いの農家に連絡し、最高の食材を使って、時には古い料理本も参考にし、手間をかけ、本当の美味しさに挑戦する。その一例だが、大統領がある暑い日に、突然、生牡蠣を食べたいと言いつつ、フランスでは牡蠣は生で食べるもの。街中に飛び出した彼女はフランスセリに飛び込み「ジラルドー」と叫ぶ。この「ジラルドー」を聞いたとき、さすがに映画はよくできていると再認識した。当方は牡蠣の専門家ですらフランス牡蠣については著書がある。「ジラルドー」とはマレンヌ・オレロンのブランド牡蠣、美味として有名である。

いずれにしても大統領を喜ばせたい一心で動いた結果は、様々な軋轢と障害をうみ、結果として大統領がチュニジアへ出発した留守中に、料理中に負った疲労骨折を理由に辞表を提出しエリゼ宮を去ることになった。

次に彼女が料理人として赴任したのは、何とフランスの南極調査隊であった。男だらけの基地で料理人として一年間働き、フランスに帰る送別会で大統領との想いを込めて作った「サントノール」デザートを囲んだ四人、赤ワイングラスで「チーン」と一斉に乾杯した。

「ワイングラスは音を鳴らして乾杯しないのがマナー」ではないか。彼女はフランス人なのにマナー違反をしている。と指摘するのは今時の時流ではないのかもしれない。

今年も欧米各地を多く回った。アメリカ、ベルギー、オランダ、デンマーク、ドイツ、スイス、イギリス、ロシア等。各地でレストランに入るが、そこで結構見かけるのが「チーン」である。仲良い仲間同士なのだろう。笑顔で乾杯している。日本の乾杯と同じ。

考えてみると、マナーは大事だが、それよりもっと以前に大切にしなければならぬものがあるのではないか。マナーが定められた本質から考えたい。マナーとは、お互いが気持ちよく、楽しく、過ごすために作られたものだろう。単なる「形式」だけではないのではないか。

よく「フォークやナイフはどのように取り扱うべきか？」というように形式から入る場合が多いが、それより「同席している人に、不快感を与えない気配り、気遣い」から「フォークやナイフの使い方」を考えたい方がよい場合もあるだろう。折角、機会があつて、一緒に食事をするのであるから、楽しく過ごした方がよいはず。本来ならばマナー違反と思つても、相手がグラスを寄せてきたら、拒否し避けるのではなく、静かにグラスを合わせる方が、お互いの「楽しい時間」につながっていく。それをダニエル・デルブシュが「大統領の料理人」の中で「チーン」と教えているのではないかと思う。以上。

「歴代天皇御製歌」(二十)

貫名海屋資料館

『淳仁天皇』第四十七代・在位七五八(二十六歳)ー七六四(三十二歳)

淳仁天皇は、天武天皇の孫にあたられる。朝政に藤原仲麻呂を重用し、道鏡排斥が失敗し、廃位を宣告され、淡路島に流された。翌年、その地において崩御。

淳仁天皇の御代、大伴家持が一首残している。万葉集最後の和歌。

新しき年の初めの初春の今日降る雪のいやけし吉事

七五九年正月 万葉集巻20ー4516

新しい年がはじまり、初春の今日、降りしきる雪のように良い事が次々積み重なることを

淳仁天皇の歌

天地を照らす日月の極無くあるべきものを何をか思はむ

万葉集巻20ー4487

天地を照らす月や太陽のように皇位は天地無窮であるということ、何物思いなどするもか。

子規の短歌革新とアララギの歌人 (18)

佐藤 喜仙

(三) 歌よみに与ふる書―第七回―

今月の要旨

① 前回の投書に対する返信の続き

(イ) 和歌腐敗論

(ロ) 腐敗改善策

「宗匠的俳句と言へば、直ちに俗気を聯想するが如く、和歌といへば、直ちに陳腐を聯想致候が年来の習慣にて、はては和歌といふ字は陳腐といふ意味の字の如く思はれ申候」

子規は和歌は腐敗しきつていと断定し、和歌を批判する人に腐敗改善の対策を聞いても、その人は首をふつて対策はもはや無いと答えたという。それは、あたかも名医が匙を投げた死際の病人に対するが如き感じを持つた人と見うけられた。だが子規の考えはこの様な考えを持つた人々とは異なり、和歌の精神こそ衰えているが、形骸はなお保ちたいと述べ、更に今その腐敗している精神を入れ替えないと、再び健全なる和歌として文壇に認

められることは無いであろうと論じている。

そのうえで和歌腐敗の改善策を述べている。

「この腐敗と申すは趣向の変化せざるが原因にて、また趣向の変化せざるは用語の少きが原因と被存候。故に趣向の変化を望まば、是非とも用語の区域を広くせざるべからず、用語多くなれば従つて趣向も変化可致候」

用語を広げる具体策の一例として、外国語を使うべきであるとし、漢詩を作る、あるいは西洋の言語での作詩、極端なことを言えばサンスクリットの詩を作ろうとも、日本人が作ったのであるならばそれは日本の文学であると改善策を展開している。

馬、梅、蝶、菊を初めとする漢語を除いたならば、「源氏物語」「枕草子」をはじめとして以降の作品はなりたたなかつたであろう。

中世の人々が、その頃新しく入つて来た漢語を使いこなしたからこそ、今や本来の日本語の如き錯覚に陥る迄になつたのである。従がつて現在外国語であつても、将来には日本語とみなされるかも知れない。いかなる言葉であつても美の意識をもって使えばそれは詩語である。漢語でも洋語でも、文学的に美の意識を持つて使うならば、それらは皆和歌の言葉になるのではなからうか、と結んでいる。

富士山の短歌（4） 夏目勝弘

宮廷篇

明治天皇御製

○萬代の國のしつめと大空にあふくは富士のたかねなりけり
東伏見宮故依仁親王妃周子殿下御歌

○ならふへきものこそなけれあさ日かけ雪にかかやく富士の遠山

○うるはしき不二のたかねは外国の人にほこらむひとつなりけり
梨本宮守正王妃従伊都子殿下御歌

○夕やけに富士のいただき色はえて裾野はもやにつつまれにけり
諸臣の歌

池邊義象

○富士のねは夢に入るたにうれしきを朝夕まにあふきみるかな
税所敦子

年のはしめに富士の山をみそなはして歌奉るへう仰言ありにけるに

○あしひきの山をたのしむ御心にかなふや富士のたかねなるらむ
三條公輝

○しみたてる庭の木す糸の冬枯れに見えこそわたれ富士の高嶺も
武島又次郎

○あをあをと太古の水をたたへたるみつうみにうつる神富士の影
田中光顯

○おのつからけたかき富士の山なれば神と仰かむほかなかりけり
千葉胤明

○春もなほ富士の嶺おろしきゆる夜は千鳥なくなりうきしまか原
水野忠敬

○こちよく富士も筑波もみゆるまで霧はれわたる朝ほらけかな
宮中歌御會始撰歌集・自明治十二年 至昭和十二年

從五位井上義行女 わかな

○日の本のうへに立つへき國そなき富士よりたかき山はあれとも
愛知県 中野知佳

京都府 井關鐵之助

○富士の嶺のゆきのひかりにあけそめて年たちかへる田子の浦波
朝日さす富士のたかねはとほけれどゆきは都のひかりなりけり
以上宮廷篇

番外篇

新萬葉集の伊藤左千夫と長塚節の歌のなかに富士を詠んだ短歌が載っていなかったので歌集のなかを調べてみた。

伊藤左千夫歌集三一六八首中六首あり。

長塚節歌集一三九九首に富士山の歌なし。

伊藤左千夫の六首を、番外篇として載せる。

○天近き富士のねに居て新玉の年迎へんとわれ思ひにき
(明治三十三年)

○天の下事もあらねばものゝふのひまのなぐさの富士野の御狩
(富士の巻狩)

○雄心しいやたか／＼に神山の富士の荒山ふみさくみこね
(富士詣の反歌)

○天の原富士の高峯の頂きに立てらくこゝろ時じくにあれ
人皆が高きをめづる富士にだに裾野の湖の若葉をぞおもふ
(明治四十年)

○久方の三ヶ月の湖ゆふ暮れて富士の裾野雲しつまれり

「氷魚」のことから (156) 岡本八千代

子規の小説「我が病」第二回。

題名が「我が病」とあるから、子規は自分自身のことを客観的に見つめたり、主観的にみつめたりして描写していったにちがいない。その綿密な写生は、或る時息苦しくまた或る時悲しく哀れになりつつ描いていったように思えてならない。

子規全集(第一巻)の月報9に「見える人の孤独」と題して、詩人の松永伍一氏はこう書いている。(以下原文)

・「病める人間は死という決定的な恐怖をも予感しながら、対峙しているすべての事物を油断なく見ていなくてはならない」

・「子規はそのことに徹することによって何かが生れるのだ、ということを最初に発見した文学者であろう。恐怖とからまった視線を彼は唯一の武器とした。」

・「『写生』とは、そこから生れた子規の方法だった、とみるべきではあるまいか」

と、あった。そういうことも頭において、この小説を読んでいった。

第二回。明治28年、2月28日の日のこと。

・「余はいよいよ従軍する事がきまった。三月三日に出立する筈にきめて用意にとりかかった。かなり嬉しかった余」

・しかし、余の新聞社の人も、医者も、体を気づかって反対した。△玉井正枝(八・九歳若い男)に自分の従軍の後のこと頼みに行った。「酒はなるべくよしたまえ」とか、「些細な世上の

葛藤にからまれて憂鬱病に落ちるようでは困る」とか注意。
・「結婚は、大文学者になるに都合が善ければ女房を持った方がいい」。

・「万一失恋のために一生何事も出来ずにすむというような事のないように」。

・その他、「下宿代はどうか。牛肉食べて肥えなければ文学者になれないよ。」等々。

△五十嵐(真砂町に住む)に会いに行った。

・あまり働きのない男だけれど極めて正直な人。文学趣味のない普通の俗人。

・金持ちだが、金持くさくない人。

・妹にとよ子という人があった。

・五十嵐は、松尾(主人公)に妹を娶ってもらいたかった。が、妹のとよ子は玉井の愛人であったので、自分の妻にすることとはどんな理由があってもできないとしていた。——余。

・五十嵐は妹に編ませ靴下と足袋を松尾に送った。

子規の体調はかなり悪かったのに、従軍記者としていいよ出発することになる。第二回は行く前の自分とのかかわりのある主な人との交流が書かれている。ちよつとした処に、子規の優しさが書かれているが、とりあらず、あらずじを追ったまでとする。

第三回は、次回に。従軍記者としての別れを書くことになろう。

母とは「それじゃ行つてきます」だけの挨拶をして新聞社に向う子規の男らしさから。

ことのはスケッチ(421) 今泉由利

飛驒高山游中(六十歳代に川上淇堂を高山に訪ねた時)
水田渺渺稻花香、匠匠濃嵐接莽蒼。

蓑袂笠檐時出沒、一欄煙雨似瀟湘

水田渺渺べうべうとして 稻花たうくわ 香かんし 匠匠さかえんたる 農風は 莽蒼まうそうに接す。

縁、貫名海屋に繋ぐ玉由と由野。外国で生れ育ち、暮すゆえ、知らないまま…うろ覚えのまま…時が過ぎる。彼女達と私と、共に日本を祖先を知ってゆこうと思いは至った。

〔貫名海屋。菘翁。号多数。安永7年3月生(1778年)

一 文久3年没(1863年)。江戸時代後期、儒学者。空海の書を学び、王羲之、王献之の把握に努めた書家。幕末の三筆と称され。文人画家。詩人。唐詩、頼山陽と論じ…。

貫名海屋の詩

文政十七家絶句

春夜

光風綺月度林頭。花影溶_レ庭踏欲_レ流。半夜玉人猶未_レ寝。笛声遥在_二水晶楼_一。

春風 綺月きげつ 林頭を 度り、花影 溶溶として 踏まば 流

れんと欲す。

半夜 玉人 猶ほ未だ寝ねず、笛聲 遥か水精樓に在り。

心地良く風がゆく美しい月は 林の上にある ゆったりと月の光りの花影を 踏んでゆきゆくことにしよう。

夜ふけてあの美しい人は いまだ寝られずにいるだろうか
はるか彼方から もうろうとして笛の音が (私注)

蓑袂さへい 笠檐りふえん 時に出沒すれば、一欄の煙雨 瀟湘しょうしょうに似たり。

水田は広々として稲の花が香る。たちこめた霧は、はるか彼方まで青い草木をかすませて蓑笠の人をときおりみかけると、窓の外の霧雨は、瀟湘(中国の大河)に似ているなあ。(私注)

錦織里新居 (錦織里新居詠草 歌卷)

朝な朝なおひそふ野面のわか草を
まがきのまゝに見るぞうれしき

梅柳くれなひのはなこきまぜて

名におふ村のにしきおるめる

わがうゑしくれ竹いまだのびざれば

待わぶるなりうぐひすのこゑ

富子の歌贈らるゝに答

里人となるたのしさはわかかつみ

あやめ引つゝ問ふ伴もあり

編集室だより 二〇一三年 十一月

○宮城の友より、いつものように新米をどっさりいただいた。ニコニコしている。

○「絹の話」の「バックナンバーを全部揃えたい」との連絡あり。連載三年になる。

○タンゴ・エモーション。王子^{北とびあ}に於て。アルゼンチンから、私の友人、エンリケ・クッテイニがひきいるタンゴ楽団の、二十六年間に及ぶ来日公演。素晴らしい音楽。素晴らしい心の持主。年末になってくると…毎年エンリケに会える。

○ビッグバンから138億年、宇宙はいま^{宇宙観測から}加速器実験まで。東京大学本郷キャンパスに於て。

村山齊博士のビッグス粒子。杉山直博士の宇宙の始まり。面白く、興味深く、しっかりと講義を受ける。

○家のすぐ近くに「王子額販」額縁屋さんがあり、私の無理難題をみんなきいてくださる。今一番多いのが、額縁のガラスをアクリルに取り換えること。いくら換えてもまだ終らない。

○上野、国立西洋美術館。ミケランジェロ展。今、催されているのは、もう何度も観ることになるのだけれど、やっぱり見にゆく。上野まで、十分、私の近くに來て下さるのだから、こんなにありがたいことはない。

○家から100歩くらいのプラネタリウムへ。アイソン彗

星。獅子座流星群。住んでいる王子の今夜の星空。レトロな大好きなところ。

○二十年來の友人のあつ子さん。洋裁のプロ。大きくなった、小さくなったたりした洋服をみんな直して下さる。彼女のおかげ大好きな洋服は、いつまでも着ていられる。

○小金井体育館での卓球練習の後、近くの、何やら世界一だという「多摩六都科学館」へ行く。チャレンジ^{しくみ}「自然」地球^をを通りすぎ、さすがに大きいプラネタリウム空間。でも、ウチのレトロな小さなプラネタリウムと同じことをしていた。

○同期の新年会の下見。泉岳寺辺り、どこもかしこも大変な変わりようだけれど、泉岳寺は、以前訪ねた時の面影は何もなかった。がっかり。

○今月の吟行は、東大、本郷辺り、古さも新しさも良い加減に混じって趣が良い。炭^{たん}団坂、菊坂、鐘^{かね}坂、梨の木坂、胸突坂[。]。樋口一葉、坪内逍遙[。]。

○オランダヒルズ・森タワー2F。こんなところへ何をしにゆくのか！長く付き合ってきた歯のメンテナンスにゆく。不安要素を一つも残さない。

○朝4時半、目覚まし。6時16分、のぞみに乗る。京都に着く、8時29分。近鉄京橿特急、京都発8時45分。大和八木着、9時32分。10時、時習館関西支部調達のバスに乗る。大神神社、正式参拝、鈴、お祓、神酒、神水、宮司に会う。大和三山。橘寺、精進料理。石舞台、橿原考古学研究所。大和八木駅より朝と同じ道を帰る。東京着22時。

頌 春

平成二十六年元旦

三河アララギ会

青木玉枝

(新城市)

安藤和代

(豊川市)

胃甲節子

(豊橋市)

今泉由利

(東京都)

伊与田広子

(豊橋市)

伊藤忠男

(大阪市)

遠藤脩子

(蒲郡市)

岡本八千代

(蒲郡市)

小野可南子

(豊川市)

清澤範子

(春日井市)

近藤映子

(名古屋市)

佐藤喜仙

(東京都)

鈴木孝雄

(沼津市)

杉浦恵美子

(蒲郡市)

高山玉由野

(USA)

富岡和子

(東京都)

内藤志げ

(豊川市)

夏目勝弘

(豊川市)

林伊佐子

(岡崎市)

半田うめ子

(新城市)

平松裕子

(豊川市)

平松温子

(東京都)

堀川勝子

(豊川市)

山口千恵子

(豊川市)

山本恵子

(豊川市)

弓谷久子

(豊川市)

和菓子街道 (87)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

伊勢街道(10)

城下町として、宿場町として栄えた津だが、その中心部にある津観音の門前町という側面も持っている。元明天皇の御代の和銅2年(709)、安濃津の浦で漁をしていた漁夫の網にかかった聖観世音菩薩を本尊とする恵日山観音寺は、かつての大伽藍こそ戦火で焼失してしまったが、今でも津観音として親しまれている。本坊・大宝院の本尊は阿弥陀如来で、伊勢神宮の天照大御神の本地仏でもある阿弥陀仏に参拝しなければ片参りになるといわれ、参宮者はこぞって大宝院に参ったのだそう。

慶応元年(1865)創業というお焼屋は、この津観音門前の茶店から出発した菓子屋だ。当初は丸い焼餅を売っていたためこの名があるという。

名物の「津の俵牛」は、津観音の縁日などで売られた郷土玩具の土鈴「伊勢津俵牛」を模った求肥と粒餡入りの最中だ。俵を背に乗せた



牛の形が素朴でかわいらしい。

郷土玩具は作り手が途絶えて失われてしまったが、この最中が津の歴史の一コマを語り継いでくれそうだ。

大粒で存在感のある小豆の中に舌触り滑らかな求肥が埋もれている。

◆お焼屋

住所：三重県津市大門24-1

電話：059-228-4897

お知らせ

▽二月号の原稿は、一月一日(水)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

※掲載すみの原稿は毎月の三河アララギ誌と共に返送しますので、返送用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

▽2014 1/9(木) 15:00~17:00

アトリエテレビ(神田扇ビル4階)

山崎和樹「草木染めの話」。

終了後、インド料理の新年会があります。
問い合わせ 03-6904-2568

編集後記

△新年おめでとうございます。

平成二十六年新年号(第六十一卷第一号)をお届けします。

厳しい暑さがいつまでも続いた昨年の秋でしたが、急にやってきた寒さに、体調をくずしたりしないよう、気をつけてお過ごし下さい。年月のたつのが、年々早くなるような感じがしています。

新しい年、心も新たに、作歌に励み、気持ちも、体も生き〜とした日々を送りたいものと思えます。

△年賀広告を掲載いたしました。
二千元をお送り下さい。

(山口)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができます。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月日より、半ヶ年分一万円、一ヶ年分二万円の割で前納されたり。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たたちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができます。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができます。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十五年十二月二十五日印刷 第六十一卷 第一号
平成二十六年一月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野可南子・夏目勝弘

発行人

平松 裕子・山口千恵子

発行所

今泉由利

三河アララギ会

三河アララギ発行所 〒一四一〇〇三二

東京都北区王子本町一の二六の六A

T E L (〇三)五九二四一〇六五

振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九

E-mail yuri88@cronos.oon.ne.jp

Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所

株式会社 桜創美